

学校へ来ることを習慣付け、学習に向かうためのきっかけをつくる時間

不登校児童の状況

対象児童は、小学校4年生である。3年生の2学期から欠席するようになり、3学期以降、現在に至るまでほとんど登校ができなくなった。

保護者は登校を強く望んでいるが、当該児童の登校したくないという意志が強く、登校につなげることができずにいる。保護者は辛抱強く対応している。

具体的な取組

○安心して定期的に通えるようにするためのサポート

- ・対面では、保護者以外の人とほとんど接することができなかったため、保護者にも同席してもらい、困ったときには保護者にサポートしてもらえるようにした。少しずつ同席する時間を減らし、支援員と信頼関係を築き、安心できる職員として認識されるようにした。

○楽しんで参加できる工夫

- ・思考しながら遊ぶことが好きだという当該児童の良さを生かしたゲームを選択できるようにし、支援員と楽しさを共有する場となるようにした。
- ・オンラインゲームとは異なるリアルなやりとりやコミュニケーションの楽しさを味わえるよう、ボードゲームやカードゲームを用意した。



しさを味わえるよう、ボードゲームやカードゲームを用意した。

○学習への糸口を見付けるための対話と教材選択

- ・理科の実験教材を支援員と共に組み立てて動かしたり、工夫したりする中で、在籍学級での学習内容に触れられるようにした。
- ・当該児童が好きなことを使って学習に生かせるように教材を工夫した。(例：国旗が好き→国旗クイズ→書く活動につなげる)

○活リズムを意識させる働きかけ

- ・就寝時刻や起床時刻のルールを当該児童と相談し、目標を設定した。
- ・設定した目標について、それができたかどうか報告するようにして、生活リズムを意識しながら生活できるように支援した。

成果

年度始めは、SCとの関わりしかなかったが、校内別室での支援を始めて、学校に来ることが習慣として身に付いてきた。結果、週1日、登校できるようになった。別室支援で触れる様々なものに興味を示し、コミュニケーションを楽しむようになってきた。

課題

書くことへの抵抗が強いが、校内別室指導支援員との関わりにより、書く活動を楽しく取り入れていく。

担任の継続した関わりと組織的な対応について

不登校児童の状況

対象児童は、小学校 4 年生頃から対人不安になり、集団の中にいることに不安を覚え、欠席が増えた。5 年生までは、登校していたが、2 学期に入り欠席、もしくは保健室で過ごすことが更に増え、その後、教室に入ることを拒むようになり、10 月から欠席が続いている。

具体的な取組

○児童との継続した関わり

当該児童に負担にならない程度に家庭連絡を行い、学習内容や家庭での児童の様子を聞くなど情報共有を行った。

当該児童とは、学習からの関わりではなく、カードゲームなど児童が興味をもっているものから徐々に学習指導に移行していった。最近は、放課後に理科や家庭科の指導を行うことができた。

○ＳＣによるカウンセリング（週 1 回）

保護者の困り感や今後の不安を軽減するために、定期的にカウンセリングを実施した。

また、個人情報に留意しながら、ＳＣと情報共有を行い、登校に向けて支援方法を検討した。それと同時に、担任からの保護者連絡も継続して行った。

○校内別室の教室環境の見直し

空き教室を活用し、パーティションを置くなどして、児童が教室に入れない時に学習や悩みを聞ける場を設定した。



○教育支援センターの活用

外出の機会や学習生活の場、人とのふれあいの場として活用する。教育支援センターには継続して通うことはできていないが、教育支援センターと出席状況や学習状況を共有しながら、効果的な支援について連携した。

成果

支援開始時は、家庭訪問を中心とした支援が主であったが、継続して支援した結果、不定期であるが、放課後、他の児童がいない時間に登校し、担任から授業を受けられるようになった。

課題

今行っている取組は継続して行いつつ、当該児童の状況に合わせて、学習の理解へとつなげていく。

不登校生徒が校内で過ごす校内別室の活用について

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校 2 年生の後半から集団生活に適応することが難しくなり、教室に入ることができなくなった。学習への意欲はあり、3 年生に進級後は進路のために各教科の学習に取り組むことを望んでいた。校内別室を利用し、自学自習に取り組むとともに、各教科の教員からの支援を受けて生活している。

具体的な取組

○校内別室の入室

担任が窓口になり校内別室を紹介した。担当教員による生徒・保護者面談を行い、当該生徒の状況や希望に応じた利用を提案した。当該生徒はほぼ毎朝登校し、自習や各教科の学習に取り組み、午後まで過ごした。



○別室生徒担当教員の分担表の活用

各学年において授業のない教員による分担表を作成し、その時間帯に別室で過ごす生徒へ声をかけ、学習面を含めた支援を行った。当該生徒は、担任以外にも教科担当や学年の教員から授業課題のフォローや実技指導などを受けた。

○情報共有

毎週行う教育相談部会に S C や S S W が参加し、生徒の情報共有や対策を検討した。また、サポートルームの支援員の記録を共有して担当教員と支援員とで引き継ぎを行い、生徒理解につなげた。学校全体で、支援が必要な生徒の情報共有、対策に努めた。

○進路学習会の開催

市内の不登校生徒の保護者を対象にした進路学習会を開催した。通信制高等学校の先生や卒業生の保護者を招き、高校生活の内容や保護者の経験談を聞く会とした。参加した中学生の保護者からは「参考になった」、「不安が解消された」との声が多く、有意義な会となった。

成果

学校に登校したいが教室に入ることが難しい生徒の居場所として、校内別室は有効である。当該生徒は、校内別室の支援により 9 教科全ての定期考査や実技課題に取り組み、希望の進路決定に向けて前向きに取り組んでいる。

課題

利用する生徒が多くなることで生徒それぞれのニーズが異なり、個別で過ごす場所の確保が難しい。

校内別室での支援について

不登校生徒の状況

小学校 3 年生から立ち眩みや午前中の体調不良により、年間出席日数の半分も登校できない状況になる。中学校では、中学校 2 年生までほとんど登校することができなかった。今年度から、別室登校を開始し、支援員との信頼関係を築いて、完全個別対応から他の不登校生徒がいる空間でも過ごせるようになり、毎週 1 時間登校できるようになっている。

具体的な取組

○切れ目のない支援

担任と当該生徒・保護者との面談を継続した。また、学校全体で取り組んでいる支援の記録を支援員と情報共有した。

○自立に向けての取組

校内別室利用開始当初は、保護者同伴での利用だったが、保護者の同席時間の短縮、校内図書館を当該生徒のみで利用する等スモールステップを重ね、一人での登下校に挑戦できるように支援した。

○不安感の緩和

同学年の視線が気になるなど、不安感が強かったため、他の生徒の教室移動と登下校の時間が重ならないようにした。

○環境整備

登校支援に加え、学習支援を希望する校内別室の利用者が増加した。

そのため、パーティションとミーティングテーブルをうまく活用し、個別活動と小集団活動を組み合わせて、集団が苦手な生徒も参加したいと思える別室づくりを目指した。



成果

当該生徒は、学校行事に参加し、教科の学習も再開するなど、大きな変化があった。

進路についても、早くから学校見学に参加し、体調が安定してきたこともあり意欲的に活動できている。

課題

進学に向けての不安等があるので、少しでも軽減されるような情報提供や支援が必要である。

別室で自信を、学習教室で学力を、面談で状況把握を

不登校生徒の状況

対象生徒は、小学校高学年から不登校が始まった。中学校入学後も4月当初から欠席が目立ち、1年生では週1日、SCとの面談や特別支援教室に通う程度だった。教室のような集団の空間が苦手で、身を縮めてしまうことがある。2年生になり、SCとの面談や個別の学習教室、別室への登校を継続してできるようになった。

具体的な取組

○別室対応による不登校生徒の支援

別室指導支援員が褒め、認め、励まし、伸ばすプラスの言葉を意識して、生徒との会話や学習支援を行い、少しずつ自信がもてるようにした。静かで落ち着いたある別室環境を整備し、修学旅行の作文、まとめの新聞など、支援員の励ましを得ながら粘り強く完成することができた。



○個別の学習教室による支援

週2回、1時間ずつの個別の学習教室を開き、基礎的事項の復習や授業内容の補習等を行っている。支援員は、その日の様子や学習内容を口頭または文書で担任に報告している。特別支援教育コーディネーターである養護教諭が支援員と密に連携し、学習の予定等を立てている。



○他の教員等との面談

当該生徒は1年生のときに特別支援教室に通室していたこともあり、別室登校した際に、専門員や巡回指導教員が面談を継続して行った。

○SCによるカウンセリング

週1回、当該生徒の不安や状況を確認することを目的に面談を実施した。

SCは、面談で得られた情報を可能な限り定例の特別支援委員会で情報提供し、別室での支援に生かした。

成果

当該生徒は、3年生で興味のある教科の授業に出席し、修学旅行や合唱祭に参加することもできた。

その他、別室登校ができるようになった生徒が2人いて、不登校「継続」生徒が6人減少した。

課題

別室登校できるようになった生徒を次のステップである学習支援につなげることが課題である。

校内別室を活用した支援について

不登校生徒の状況

対象生徒は、集団での生活や同学年との人間関係に抵抗を感じており、1学期中盤から登校しぶりが見られるようになった。登校前に体調不良を訴えることが多く、保護者もこうした状況を心配しており、校内別室に入室した。校内別室には安定して通えるようになり、学習やコミュニケーションスキル等の課題が見えてきた。

具体的な取組

○居場所としての役割

毎日学校の授業時間に合わせて校内別室を開室している。

校内別室に登校し、休憩してから教室に行く、休み時間や疲れた時は校内別室に戻って来るなど、当該生徒にとって安心できる場所になるようにしている。

○気持ちの整理ができる場所

登校後、健康観察時に精神状態やその日の予定を確認し、必要に応じてゆっくり話を聞く時間を設けた。また、支援員との会話を通して相手の話を聞くことや、自分の気持ちを伝えるなどのコミュニケーションスキルの向上につなげた。

○学習の場としての役割

中学校の学習についていけないことが学校に足が向かない理由の一つになっている可能性がある。このことから、校内別室で各教科の提出物の確認や当該生徒のペースに合わせて学習を行うことで、学習に対する自信をもてるようにし、在籍学級の授業へ行けるように支援した。

○生徒のニーズにあった環境整備

今年度校内別室のレイアウトを変更し、今まで学習がメインだった教室環境を「居場所」を意識した配置にした。個別の学習スペースに加え、新たにソファを設置し、ゆっくりできるスペースも設けた。



成果

当該生徒は、校内別室で安心して過ごせるようになり、自分でその日の計画を立てたり、支援員と会話を楽しんだりできるようになった。教室に行っても疲れたら校内別室に戻って来るなど、当該生徒にとって「居場所」となっている。

課題

当該生徒の心身の状態に合わせて、サポート教室での過ごし方や教室へ促すかどうかを見極め、判断することが課題である。

校内別室における支援について

不登校生徒の状況

対象生徒は、小学生のときから学習の定着に課題があり、それを取り戻せず中学校の授業に付いていくことが難しい。コミュニケーションが苦手で、集団で生活することに課題を感じている。体調不良等による欠席がきっかけで、教室に戻れなくなった。

具体的な取組

○校内別室の運営について

校内別室は、基本毎日開室している。利用の際は申請書を提出し、決められた曜日と時間に通室することになっている。



○生徒のニーズに合わせた支援指導

校内別室を利用する生徒の実態に合わせて、学習指導だけでなくコミュニケーションをできる場所としても利用できるようにした。

別室指導支援員が複数いるため、生徒が接しやすい別室指導支援員と活動することができるようにした。

○学習支援

学習の遅れで不登校傾向になった生徒に対し、保護者が付き添いやすい時間帯や当該生徒の苦手な教科のない曜日等を考慮している。

苦手教科の時間は校内別室で支援することで登校意欲の低下を防いだ。

○支援会議での情報共有

毎週月曜日に実施する校内支援会議で、別室利用状況や生徒の様子等、情報共有を行った。

成果

当該生徒が接しやすい別室指導支援員と活動することにより、コミュニケーションが取れるようになり、学習に取り組もうとする意欲が向上した。

生徒の状況に応じた無理のない時間設定で登校でき、別室登校が安定している。

課題

支援会議で情報共有したことを全職員の理解につなげていくことや、教室復帰を実現することが課題である。

不登校児童の支援について

不登校児童の状況

対象児童は、小学校 1 年生で、友達との関係で不安を抱え不登校になった。2 年生で、校内別室を利用し始めた。校内別室では、児童のペースで学習を進めたり、少人数でのコミュニケーションを取ったりすることで、校内別室に行くことが楽しみになり、学級にも入れるようになった。

具体的な取組

○支援員の柔軟な対応

別室指導支援員が当該児童の在籍学級に行き、当該児童の支援を行うことで在籍学級に入りやすい環境づくりを行った。



○児童のペースに合わせた個別学習

学習の遅れや内容理解の不足を補うために、当該児童のペースに合わせた学習支援を行っている。支援員が、当該児童の気持ちに合わせて対応したり、意欲を喚起しながら学習支援を行ったりすることで、学習に継続的に取り組むことができるようにした。

○少人数での交流

休み時間には、支援員を交えて仲の良い友達と別室での交流を図るようにした。友達が来室することでコミュニケーションの対象を広げ、在籍学級への復帰をやすくしている。

○支援員と担任との効果的な連携

「支援ファイル」を作成し、支援員と担任が連携して支援を行った。ファイルには、学習内容や会話等から見られる当該児童の様子、担任への引き継ぎ内容を記載し、管理職も確認をしている。確認後には担任からのコメントも記載することで、効果的な支援を図った。

成果

支援員と当該児童の関わりや昨年度の担任からの適切な引継ぎにより登校できるようになったり、欠席日数が減ったりするなどの改善が見られた。

また、昨年度 1 年生で不登校だった児童 1 人は、支援員などの適切な関わりにより、通常の登校ができるようになった。

課題

今年度の不登校児童の 8 割は、根本的な解決には至らなかったため、引き続き家庭との連絡を図っていく。

不登校児童の未然防止の取組について

不登校児童の状況

対象児童は、不安やストレスを感じやすく、週1日は欠席する。保護者と一緒に登校することが多く、分離不安が強い。校内別室に登校し、別室指導支援員に話を聞いてもらうことで、気持ちの整理をしている。また、別室指導支援員と担任で心理的状況等についても情報を共有している。今までは遅刻をすると登校できなかったが、支援を続けていく中で1時間目途中から登校し教室へ入ることができるようになってきた。

具体的な取組

○安心できる居場所づくり「不安の軽減と心の安定」

別室指導支援員との会話など個別の関わりをきっかけに、学校生活の不安が軽減したり、担任や友達との関わりが増えたりした。

○別室指導の環境づくり

本校は空き教室が少なく別室指導用の教室を固定できないため、教室使用表を作成し、校内別室指導がどの教室でできるのかの把握を確実にしている。

○安心できる居場所づくり「学習サポート」

欠席時に在籍学級で行った学習内容を担任が精選し、別室指導支援員に伝え、別室指導支援員が、当該児童の状況に合った学習課題を別室で学習できるようにしたり学習内容を補充したりすることで、学習面で自信がもてるようにした。



○児童の取組の共有「支援・指導の記録」

担任と別室指導支援員が直接会って話ができる機会が少ないため、当該児童の心理的状況や支援・指導した内容をノートに記録し、担任に渡している。担任からも別室指導支援員に教室での児童の様子等を伝えている。



成果

当該児童は、個別支援により自信がつき、学級で過ごす時間が増えた。

また、別室指導支援員と一対一で関わることができ、「聞いてほしい」という気持ちを受け止めたことで不安が解消した。

その結果、学習や友達との関わりに対して前向きな気持ちで登校する姿が見られるようになった。

課題

不登校傾向の児童は年々増加傾向にあり、今後の支援の仕方や環境について整備していく必要があり、別室指導支援員を含めた校内における組織的な対応をより活発にできるように検討していく。